

## 第9回 物語・小説(4)

心情③



◆ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

カドチンが校長先生によばれた。①カドチンは、いやな顔をした。どうせろくなことはあるまい、ちえつ、そんな顔だ。

なんやろな、と、ドテカボチャも心配した。

「カドチン、なんぞ悪いことでもしたんか」

玉エモンが気にして声をかけた。

「悪いことは毎日しとるわい」

「そらそやな」と、みんな言った。

ろうかを走るなどか、学校の前で物を売る商人に近よるなどか、階だんは一だんずつ下りろとか、三十数えている間消毒液（しよじくえき）に手をつけておけとか、そんなことをいちいち守っていたら、サカナのひものみたいになってしまう。

カドチンは、しおしお校長室に行った。みんなのつみをせおって、まるでキリストさんみたいに――。

校長室に入ると、とつ然（ぜん）校長先生は立ちあがった。カドチンにはげごしになった。

「やあやあ」

と、校長先生はやわらかい声を出したので、かろうじてカドチンは、とび出さないですんだ。

「よくやったぞ角田君」

校長先生はカドチンのかたを 1 おさえた。

20

「金賞（きんしょう）だ。金賞（きんしょう）なんだぞ。全国でたった一人なんだ角田君、先生はうれしい」

②校長先生の声はうわずつているようだ。

カドチンはキョトンとした。

「全国動物画コンクールの特賞（とくしょう）だ」

と、校長先生が言ったので、カドチンはやっと思い出した。

③もう三か月前の話だ。全校で動物園へ写生に行ったことがある。

カドチンはその時、マントヒヒをかけた。チンパンジーをかくつもりだったが、おそまつに冷やかされてやめた。おそまつは言った。

④兄弟は、かきやすいやろ」

なるほどそう言われてみると、カドチンの顔は少しサルにている。二年生の時、「そんごくう」というあだ名があったくらいだから、おそまつの言うことは、まるつきりまとはずれというわけではない。

カドチンは、人なみに気を悪くした。

「うるさいぞおそまつ。そういうおまえは、ブタザルのだんなさんやろが」

言い返したが、それでチンパンジーをかく気はなくなった。

カドチンはそれから一時間ばかり 2 園内を歩き回っていた。おおかたの子が色をつけはじめるところになって、やっとカドチンは筆をとったのだ。

カドチンはせいかくにあわず、絵は細かいところまでいねいなく。当然人より時間がかかる。大きな画用紙の真ん中にマントヒヒを一ぴきかきあげたところで時間切れになった。

「ありや」

カドチンはこまった。

45

40

35

30

25

30

カドチンはパレットの絵の具をだいたんにまぜ合わせて、画用紙の白いところに力強くぬりこんだ。と、書けば聞こえはいいんだが、本当のところはパレットをむちやくちやにかきまわして、やけくそになすりつけたんだ。

シンベエ先生に見られたら、どなられるところだ。

「へへ……。ま、ええやろ」

カドチンのめいよのためにことわっておくが、かれはいつもそうしているというわけではない。つまり、子どもというものはその時におうじて、りんきおうへんに物事をしよりするという見本を、カドチンは見せただけのことである。

カドチンは便所べんじょに行きたくなかった。便所べんじょは少しはなれた所ところにあった。カドチンは絵の上にケシゴムを置いて、あわてて走った。

幸か不幸かその時、3にわか雨がふった。カドチンは大あわてで用をすませて、とんで帰ってきた。

「うひゃー」

絵はかなりぬれていた。雨つぶのあとまでついていて。カドチンはそれを消そうとして、画用紙をゆすった。マントヒヒは絵の具がすっかりかわいていたので、そんなにひがいは受けなかった。ほかの部分が問題だった。絵の具が水とまざって流れたんだ。ところがそれがよかった。流れた絵の具はおたがいにいりまじって、筆ではとてもかけない、一種いっしゅどくとくなくこうかが生まれた。うす暗いオリの中で目だけ光らせ、つくねんとすわっているマントヒヒ、そんな感じの絵になった。

シンベエ先生は、その絵を見ておどろいた。こりやたいへんな絵だと思った。そのことをカドチンに言うと、カドチンは正直に雨に打た

れてそうなったことを話した。

「ケガの功名こうめいにしても、なかなかいい絵や」

ほめてくれたので、カドチンはうれしかった。だけど、それっきりその絵のことはわすれていたんだ。

校長先生があまりにほめるので、カドチンは悪いような気がした。

(あの絵は雨がかったんやで)

と、言おうとしたが、そうするとせっかくよろこんでいる校長先生がらくたんするような気がして、口をつぐんだ。

カドチンはしかたなく、クニヤクニヤとコンニヤクのひしやげたような顔をして、5自分の気持ちを表した。校長先生はカドチンが照れ

ているのだと思った。  
よく日、朝会でカドチンは表しようを受けた。たくさんしょうひんの賞品をもらった。

教室に入って、みんなは、

「すごい」

と言ったが、カドチンは、  
「もうかったア」と言った。

カドチンがよろこんでいたのは、一日だけだ。

次の日、新聞社の人ひとが来た。カドチンはいろいろたずねられた。絵のことを聞かれたら、半分は雨がかったと言うつもりだったが、そんなことは聞かなかった。くだらないしつ問ばかりするので、カドチンはトンチンカンな返事ばかりした。

「角田君は絵をかくのが好きですか？」

「きらいや」

新聞記者は変な顔へんをした。



からですか。「〜こと。」という文末で、文章中の言葉を使って二十五字以内で答えなさい。

問四 — 線③ 「もう三か月も前の話だ」とありますが、「三か月も

前の話」について書かれているのは、ここからどこまでですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「〜たいへんな絵だと思った。」(70行め) まで

イ 「〜わすれていたんだ。」(74行め) まで

ウ 「〜照れているのだと思った。」(81行め) まで

エ 「〜一日だけだ。」(88行め) まで

問五 — 線④ 「兄弟は、かきやすいやろ」とありますが、なぜ「お

そまつ」は、チンパンジーのことを「兄弟」と言っているのですか。文章中の言葉を使って二十五字以内で答えなさい。

問六 — 線⑤ 「自分の気持ち」を次のように説明しました。次の文

の空欄にあてはまる言葉を、それぞれ指定の字数でぬき出して答えなさい。

・校長先生を A 四字 させたくないため、マントヒヒの絵は自分だけの力ではなく半分は B 五字 ののだと言うことができずに、だまってほめられている自分をうしろめたく思っている。

問七 — 線⑥ 「自分でもはっきり分かるほどふきげんになった」と

ありますが、この時の「カドチン」のようすの説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ほんとうは自分が動物画をかいたのではないと知っている。せに、いやみつぱく絵をほめてくる人びとに、腹を立てている。イ 動物画は自分一人の力でかいたわけではないのに、その事情を知ろうともせず自分をもてはやす人びとに、いらだっている。ウ 絵を見る目など持っていないくせに、まわりがそう言うからいい絵なのだろうと決めつける人びとのいいかげんさに、あきれている。

問八 「カドチン」の性格の説明として最も適切なものを次から選び、

記号で答えなさい。

ア 気が強くて自信家だが、他人のちょっとしたことばで傷ついてしまうかよわい面もある。

イ わんぱくな性格だが、うそを嫌う繊細さや、人の気持ちを思いやるやさしさも持っている。

ウ 何かにつけて楽をしようとする怠け者だが、正義感が強く、いざという時には頼りになる。